

---

# ラヴベクトルのむく方向

微熱

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ラヴベクトルのむく方向

### 【Nコード】

N7781N

### 【作者名】

微熱

### 【あらすじ】

あおぞら ゆくむ  
青空征霧

26歳と

いちかわ あきね  
市川明希音

28歳の

アンバランスで、噛み合わない。だけど愛されたいし愛したい。BL。

## 右方向（前書き）

【眠れない夜に】が完結するまでは何か月も更新されない場合があります。気長に待っていてください。

書きためているページまでは1日、2日に一度1ページ更新出来ればと思っています。

## 右方向

冷たい。

寒い。

怖い。

これは夢なのか。

それにしてはいささか残酷すぎる気がするのは俺だけ？

どうしても逃れられない。

事後のあと。

一人急速に冷める身体は誰も温めてはくれない。

一夜だけ。熱い夜を過ごして。終わったたらさつさと相手は帰っていきそんな毎日。

辛くはない。

それはもう俺にとってあまりに日常すぎて。

取り立ててひっかかる事もない。

だけど一つ。

この虚しさだけは。

いつまでたっても俺の胸の奥底を食い荒らし続けている。  
忘れていた情感を、残さず食い潰していくように。

だがもはや俺も一々それにあらがったりはしない。

運命なんだ。

割り切る事を覚えた大人に、悪あがきは無用だろう。

俺だってもう28だ。

淋しさに打ち拉がれたって泣いたりはしない。

それくらいは、成長した大人だと自負している。

今更特定の相手を作る気もない。

それこそ野暮だ。

どうせ潮時になれば親が見合い相手でも勝手に用意するだろう。

別にそれまで乱れた性生活を送っていても、だれも咎めないはずだ。

寝る『相手』が『男』でも。

## 右方向2

「明希音さんこれどうします?」

「あーその書類は後で俺が目を通しておくからそこおいといてくれ」

「はい」

下半身にだらしない俺だが、そんな俺でもきつちり会社を“持っている”。

四年前に、とあるコネクションを使って立ち上げたのは多岐にわたるデザインを請け負う会社だ。

ある時はゲームやアニメのキャラクターデザイン。またある時は大企業のWEBデザインまで。

俺の会社は様々な分野のデザイナーを雇っていて、企業に貸し出すこともあれば、自分で好きな仕事を取らせたり与えたりしている。

結構何をしても許すことにしているからか、いまだ大きな問題や不祥事が起こったことはない。

そのおかげか何かは知らないが、結構儲かっている。

この間、社員の一人が有名企業CMを作ってかなり名が売れた。怖いほど順風満帆で今のところ仕事に困ることは無い。

「アキちゃん、東雲さん」

デスクに向かって物思いに耽っていると、一人の社員が、俺と秘書の東雲を呼んだ。

「なんで社長の俺が“ちゃん”で秘書の東雲は“さん”なんだよ」「えーアキちゃんはかわいいからです。東雲さんは怖いからです」

なんの躊躇いもなく即答されると、やはり会社の方針をかえようかと本気で悩みたくなる。

やれやれと首を振る俺に変わって、俺より断然社長らしい東雲が、威圧感たっぷりブルーの眼鏡をくいつと指で持ち上げた。

「社長で遊んでないで、用件はなんです？高城」

「ひっ……あ……えっと次の仕事の事で……」

高城は少し青ざめながら、たどたどしく言っつ。

東雲はまた鬼をちらつかせながら微笑み、高城を身震いさせた。

「まあまあ東雲。高城も怯えすぎだぞ？」

「アキちゃんあん」

「い・ち・か・わ・社長！」

せっかく助け船を出してやったと言っのに高城って奴は……。

「まあそろそろ次の仕事を頼もうと思ってたところだった」

「何々!？」

「タメ語!」

「こいつには仕事より先に言葉遣いを叩きこむべきだな。」



### 右方向3

「高城にはうちの会社のHP改装のデザインを頼みたかったんだよ」

「ええええ!?!」

「マスオかお前は。まあやってくれるよな?」

「そんな……俺みたいな三流デザイナーがやっていいんですか!?!」

随分な謙遜をする高城は驚きに瞳をゆらす反面、嬉しさを滲ませている。

まったく、高城は可愛いんだから。

「能力を見込んだ人間にしか、頼まないよ。何てったってWEBページは会社の顔だ。全ての人間の心を驚掴みするようなものを期待してるよ」

「俺頑張るっ!!社長俺頑張るからっ!!」

高城はそう力むと、俺の手を掴んでブンブン上下に振った。

しばらくそうしたあと、高城は早速「浮かんできたっ!!」と叫ぶと社長室を飛び出した。

そう言えばスルーしかけてたけど、あいつ社長って呼んだ……?」

「フフ」

「社長?」

「……文章は東雲が作ってね？」

「分かりました」

東雲はほんのり、僅かに笑みを閃かせた。あまりに瞬時的すぎて見間違えたんじゃないかというほどだったが、嫌ではないらしい。

俺も企みを含んだ怪しい笑顔を向けてから、自らのデスクへ向き直った。

手近にあった資料を掴み、直ぐ様立ち上がって彼に渡す。

「東雲。仕事取りにいくぞ」

「はい」

東雲がキラリと眼鏡のレンズを煌めかせるのを確認して、俺はコートを取って社長室を出た。

社員のためならどんな労力だって惜しまない。

ただ社長室の番人をやってるなんて、どう考えても詰まらないだろう？

## 右方向 4

某日夜

人生は何が何でも楽しんだほうが勝ちだと、俺は思っている。

綺麗事は必要最低限でいいと思うし、欲望に忠実に生きれば必然的に醜い事だって降り掛かってくるのだ。

避けられない現実は出来るだけ受け流して、手の届く可能性のある楽しみは無理をしても掴み取る。

そして。

そんな人生を謳歌するにあたり、絶対してはいけない事が一つある。それは……。

「アキさん。なんか物憂げ」

「ん〜？そっ？」

それは無意識でもあれば意識してそれを理解することもある。

どちらにせよそれは簡単に、しかしやめるのには相当の決心が必要なものだ。

「アキさんのその表情。くせになっちゃう」

「ふうん」

「ねえ、一晩だけって約束だったけどさ……また会わない？」

馴れ合いを続けたら情は必ず移り、いつの間にか片時も離れるのが辛くなる。

それが人間という生き物であり、性であり、猿から進化してきた結末だ。

しかしその進化は人を弱くする。

「会わない」

俺は気だるい身体を無理矢理ベッドから起こしながら小さな声で応えた。

「そんなあ。俺たち身体をの相性もバツチりだし、付き合っのに問題ひとつないじゃん」

「俺なんかを口説く時間があるなら、もっといい出会いを探しに行けよ」

床に散らかった服を拾い集めて、さっさと身につける。

「もう帰っちゃおうの？」

残念がる男に、俺は顔すら向けずに一言。

「明日早いんだ」

俺が人生の中で一番恐れていて、一番したくない事。

弱い俺をさらにちんけな生命体へと陥れる。

それは……。

一人の人間に、《依存》することだ。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7781n/>

---

ラヴベクトルのむく方向

2010年11月9日20時54分発行